

# 床

# 框

能村 研三

六回り目の干支

唐辛子小束に吊れば魔除けとも

旅荷置き木の実時雨を惜しむかな

葉付き柚子置く黒檀の床框

息継ぎの風の間 間に間に 朴落葉

弓なりの葦の弾力 鴉の声

はつ冬の居職の胡坐堂に入る

師系てふ尊きものよ波郷の忌

霜の夜の薪棚のある画家の庭

人里に熊徘徊の日の月齢

菰巻の松は男結び威儀正す

今年の干支は「辛丑」。「辛」は草木が枯れ、新しくなろうとしている状態、「丑」は種から芽が出ようとする状態、という意味があるようだ。昨年は世の中がコロナ禍で悩まされた年であっただけに、今年が良い年であってほしいという願いは切実なものがある。コロナ禍が早く収まり、「新しくなろうとしている」「芽を出そうとしている」というロジックをもとに、新しい年への思いは深いものがある。

私にとっては六回り目の丑年の干支。牛は古くから酪農や農業で人間を助けてくれた大切な動物であったことから、その働きぶりにあやかり、丑年は「我慢」、「これから発展する前触れ」の年になるといわれている。昨年は「沖」にとって創刊五十周年という大きな節目の年であったが、秋に予定した記念大会の開催が困難となり、延期せざるを得なかったことは残念であった。しかし、

「五十周年記念号」と『沖俳句選集九集』の刊行が予定通り出来、多くの俳壇の先生方からあたたかい反響の声をいただいた。

こうした二つの出版物の反響を噛みしめながら、じっくりと記念大会を迎えた方がより充実したものになるのではないかと思いはじめた。コロナの感染状況を充分に見極めながら記念大会の開催日を考えていきたい。

今年 は先師登四郎の「生誕百十年、没後二十年」という年にあたり、市川市文学ミュージアムでは、夏に「登四郎、研三展」を企画しており、十年前に刊行した図録を新たに改訂し、出版することも予定されている。

また、昨年九月まで二十五回にわたり「沖」に連載した「能村登四郎の軌跡」を一冊の本にまとめ「能村登四郎の百句」として出版、第八句集も春の刊行に向けて準備を進めている。

能村 研三